

何のために働くのか

—自分を創る生き方—

寺島実郎 著

現代社会は、自分が納得のいく仕事を見つけにくい時代である。本書は、では、「どうすれば生き生きと働くことができるのか」の問いに答えている良書で、キャリアガイダンスやLHRにおいて、生徒たちの指導に役立つ示唆に富んだ内容が多く含まれている。

本書の「はじめに」では、2012年の大晦日の紅白歌合戦で美輪明宏が歌った「ヨイトマケの唄」が予想外の感動と高視聴率になったことを取り上げ、この歌の深層に「働くこと」の本質に迫る手がかりと、「どんなに時代が変わっても、変わらない親の愛」を歌っているからだとして紹介している。

教育の不変の基軸は「親の背中」であり、子どもは、親が必死に生きる姿を見て、「道を踏み外す」ことはないとしている。

また、ヨイトマケの息子が「エンジニアになったぞ」と自慢できた時代は過去となり、3.11の東日本大震災を契機に科学技術への不信が広がり、エンジニアになったと自慢できた単純な時代は終わってしまったとも述べている。

第1章「働く意味を問う」では、人間はなぜ働かなければならないのかについて、「カセギ」と「ツトメ」を事例とし、「カセギ」は経済的自立であり、「ツトメ」は、社会参加や社会貢献を指すとし、この両輪を確保してはじめて大人になったと社会的に認知されるとしている。

第2章「創造的に働くフロントランナーに学ぶ」では、自分らしい仕事や天職は探して見つけるものではない。与えられた仕事は、つまらないものだったり、思いもよらないものかもしれないが、そのテーマに自分の身を投じ、歯を食いしばって対峙するうちに、自分というもの

が見えてくるのであり、目の前にある仕事に没入せず「青い鳥」を探しても何も見つからないとしている。

その実例として、著者が担当するテレビ番組「就職を機に世界と人生を考える」で、孫正義(ソフトバンク)、安藤忠雄(建築家)、鈴木修(スズキ会長)などのエピソードが紹介されている。

第3章「わが人生を振り返って」では、著者の生い立ちが紹介されている。早稲田大学時代にアルバイトで、企画・運営を任されたデパートでのイベントでは、恥をかき汗をかきながらもよい就業体験の場であったと振り返っている。大学院卒業後、商社マンとして三井物産に入社し、中東をはじめ世界各国で働いてきた。これらの実体験を通して、「自分探し」とは、「自分の適性や天職」を探しまわるのではなく、「与えられた仕事に挑戦する」ことで、「自分というもの」が見えてきたと述べている。

第4章「新しい産業社会への挑戦—時代認識への示唆」では、「いま、どんな時代を生きているのか」を自分の頭で真剣に考えれば「自分はいま、何をなすべきか」は少しずつ見えてくるとしている。国境を越えて、人・モノ・カネ・情報が行き交う現代では、国や企業は重層的なネットワークを張り、戦略的提携関係を確立し、自ら足らざる資源や価値をうまく取り込む必要があると強調している。

第5章「企業の見極め方」では、「自分は何がしたいのか」を突き詰めて考え、学校で学び身につけた知識を手がかりに、自分の関心のある領域、職域を自分に問いかけてみることを提案している。

「おわりに」では、多摩大学の学長を引き受けてから、次世代を育てる「教育」分野への思いが熱く燃え始めていると締めくくっている。

(文春新書 B5判 211頁 ¥750+税) (山下省蔵)